

4. 行動計画の総合的な推進（国民的運動に向けた課題整理）

（検討内容）

〔 里地里山保全活動行動計画2.（1）行動計画の目的 〕

・平成22年度に策定した「里地里山保全活用行動計画」を推進するため、里地里山の保全活用の意義について国民の理解を促進し、多様な主体による保全活用の取組が全国各地で国民的運動として展開されるための課題等について整理を行い、各種課題等に対応した今後の施策の展開方向について明確にするための検討を実施。



第2回検討会では、

- ①平成22年度までに実施してきた各省庁における関連施策の取組の定量評価結果を説明
- ②全国の里地里山保全活動団体等の取組の現状評価結果を説明（アンケート調査結果）

4-1. 第2回検討会での各委員からの主な意見と対応の考え方

第2回検討会で得られた主な意見

当面の対応の考え方等

【1. 各省施策及び取組の評価結果に対する意見】

① 今回の事業評価結果やアンケート調査結果をみると各種事業の効果は認められるが、それにも関わらず実は日本の里地里山は安心してはられない。
 ここに示されている効果は都市近郊部で比較的上手くいっている活動のものであり、中山間地域の里地里山は放棄林も多く、悲鳴をあげている。
 こういう実態を踏まえておかないと、今ある結果だけで効果を見ることは無責任な評価になりかねない。
 従って、公表にあたっては、積極的な活動を行っている団体の取組との限定的なものとし、一方で里山の厳しい現状を常に意識してとりまとめてほしい。

② 各省の取組については一定の効果が認められるが、未だ十分なものにはなっていない、更なる関係省庁の連携強化が必要との共通理解が図られてきていると感じられる。
 各省はこの共通理解を突破口として、真に地元役に役立つ柔軟な制度構築に努めるべきであり、次期国家戦略の改定においては、各省の横断的な取組の記載を期待したい。

- 最終的に提出のあった277件のアンケート結果について、全体の評価と中山間地域（63件）の評価を整理し比較してみた。
- 全体と中山間地域の評価結果にはそれほど大きな違いは認められなかった。
- これは、中山間地域でも比較的元気に活動が行われている団体の取組結果であったためと思われる。
 →「4-2. 里地里山保全活動団体における取組状況（全体・中山間地域別評価結果）」参照
- 従って、今回のアンケート調査結果については、都市近郊部を中心とした比較的活動が盛んな地域の取組結果であるものとして取りまとめるとともに、公表にあたってこのことに留意する。
- なお、今後は中山間地域や奥山地域の里地里山の实態についても把握していく方針。
- 次期国家戦略の改定にあたっては、引き続き里地里山や田園地域の保全の重要性を位置付けるとともに、関係省庁との連携のもと効果的な取組が図られる戦略となるよう努める。

【2. 検討の進め方に対する意見】

- ① 本検討会は、里地里山保全活動を行う市民グループ等が多く出てきたので、そういう人たちを育てるための手法等を検討し、その結果を示すといったボトムアップ型の検討を行っていることは理解できる。
しかし、その一方で、中山間地域等で疲弊している里山が数多くあるといった現状についてや全国の里地里山の植生自然度等を踏まえながら、今後、国として日本の里地里山をどのように管理していくのかといったランドデザインを示すことが必要。
- ② 里地里山の検討に関しては、農林水産業のあり方と里山ビジネスも含めた都市と農村の関係などの検討も必要であり、上述①（ボトムアップ、ランドデザイン）と併せた3つがバランス良く行われることが必要。
- ③ 里地里山の問題は国土管理の問題であり、生物の側面からだけでなく、産業や国民のライフスタイル等の変化を考慮して全体像を作っていくことが必要。

- 当該検討会は、全国の里地里山で行われている保全活用の取組を広げていくために、各レベルに応じたボトムアップを行うために必要な事項を検討する手法としている。
- しかし、当該手法の検討結果は必ずしも全ての地域において効果的なものにならない可能性もある。
- このため、現状の里地里山を評価し、里地里山の自然資源を保全活用した生産や生活のあり方等も踏まえながら、国としてのランドデザインを次期国家戦略の改定を踏まえて検討し、全国的な里地里山の将来像の策定を行い、現在実施しているボトムアップ手法と連動しながら効果的な施策の展開を図って行くことが重要。

→ 「4-3. 里地里山保全活用行動推進事業の位置付け」参照
 ● 里地里山のランドデザインにかかる具体的な検討手法については今後検討していく。

- 今後の里地里山の保全活用の検討にあたっては、都市周辺地域・中山間地域・奥山地域の各エリア特性に応じた検討を行うことが必要。
- 現状で保全活動に元気に取り組んでいる都市周辺地域は、更なる活動の拡大を図るために国民への理解促進を図るための取組を続けていく。（ボトムアップ型の継続）
- 一方、過疎化・高齢化の進展等により活力が低下している中山間地域は、長年に渡る人と自然の共生により形成されてきた固有の地域であることを踏まえながら、今後どのように管理していくのかについての検討が必要。

→ 「4-4. 里地里山のエリア特性を踏まえた方向性にかかる検討」参照

【3. 取組の推進に向けての意見】

① 里地里山の維持管理で重要なのは、いかに木質資源を燃料として利用することであるため、里山のバイオマスエネルギー利用を国策として推進すべき。

- H23.12.24に閣議決定した「日本再生の基本戦略」の食と農林漁業の再生を実現する施策に里地里山の保全活動により発生する草木系バイオマスエネルギー利用の促進を位置づけた。
- 本件を推進するため環境省はH24年度から地球温暖化対策技術開発・実証研究事業を活用し、バイオマスエネルギーの有効利用(賦存量・効果的利用量、管理・搬出・加工・流通システム等)にかかる技術開発等について検討を行っていく予定。

② 水生生物の保全には水田環境の保全が重要となるが、部分的ではなくネットワークによる水系全体の保護が必要であるため、各地域の生物多様性地域戦略に農村の水路保全を位置付けるべき。

- 地域戦略策定主体を対象とした地方説明会や地域戦略策定の手引きの改訂時に当該事項を考慮することの必要性も併せて周知する。

③ 里地里山活動が収益に結びつくことで活動は広がるものと考えられるため、ある地域が行っているような直売所による生業としての販売システムなどの制度創設を検討してはどうか。

- 真庭市のような販売システムの有効性について、他地域への参考となるよう里なびHPなどで全国へ発信。
- 同様なシステムの実施に際しては、「農山漁村活性化プロジェクト支援交付金(農水省)」等が活用可能であることも発信。
- また、現在、里地里山に生息する野生生物を活用した商品開発や環境教育などによる地域活性化と保全活用の促進を図るための手法について検討を実施しており、その結果を発信。

④ 奥山の森林において集落の農的営みの接点となっているバッファゾーンを活用した6次産業化による経済活動のモデル事業を取り入れてはどうか。

- 現在、林床を活用した薬草栽培やナラ枯れ材を活用したキノコ栽培などの活動を通じて地域住民等が継続的に里山林再生に関わる活動を支援する「森林総合利用推進事業(林野庁)」を実施中であり当該事業の成果の普及を図る。

⑤ 都市公園は全国で数多く整備され、多くの里山保全活動が行われているが、このような活動がどの程度生物多様性の保全につながっているかは疑問。保全活動が生物多様性保全につなげられるための技術指導の検討も必要。

- 一部の都市公園では、以下のとおり動植物の生息・生育地の確保等を通じ、生物多様性の保全を図っており、今後もこのような取組を継続して推進していく方針。(国交省)
- 梅小路公園「いのちの森」(京都市)では、操車場跡地に都市における生物多様性の確保の拠点となる樹林地を創出し、その保全も含め学識経験者の指導に基づき、市民の協働による植生の管理や動植物のモニタリングを行っている。また、市民協働による鳥類、植物、昆虫等多岐にわたる動植物の調査を定期的実施。
- 座間谷戸山公園(神奈川県)では、谷戸等の都市の郊外部の里山的環境について都市公園として保全を図っており、市民による谷戸の保全・管理活動を実施している。